

要旨

本発表では、ペルシア語における動詞の過去分詞と同形の形容詞を「形容詞」と称し、考察する。

まず、動詞の過去分詞と、形容詞の特徴と使い分けを示しつつ、形容詞と動詞の境界となるところを提示する。

次に、「形容詞らしさ」の程度を探るために行なった調査の概要と分析結果を示す。ペルシア語母語話者の協力のもと、122語の形容詞を対象として、「名詞+エザーフェ（前接小詞）+形容詞」という形式をとるか、また「kardan（～する）」という補助動詞が付けられるか、この2点について文法性判断を仰いだ。その結果、「名詞+エザーフェ+形容詞」にならないものが77語、「kardan」が付かない形容詞が86語あった。つまりペルシア語の形容詞は、形容詞としてより動詞としての特徴を多分に残しているものが多く、形容詞としての特性が希薄であることが判明した。

1. 問題の所在

先行研究において、ペルシア語の形容詞は、

- (1) āb -e čekīde
NOUN-水 エザーフェ ADJ-滴る
(滴る水)

(1) のように「名詞+エザーフェ（前接小詞）+形容詞」という形式が成り立ち、かつ、「性や数、主語の数に応じて形が変わることはない（吉枝 2011: 29）」とされている。

この čekīde という形容詞は、「čekīden（滴る）」という自動詞由来のもので、その過去分詞が「čekīde」、つまり形容詞と同形となっている。本発表では、このような動詞の過去分詞と同形の形容詞を「形容詞」と称する。

また、他動詞の過去分詞は、「šodan（～になる）」を伴って受身形になる。

- (2) emšab āvāz tavassot-e bānū parvāna xānde mī-šavad.
ADV-今夜 NOUN-歌 PP-～によって NOUN-夫人 PSN-パルヴァーナ Vt-PASTP-歌う Vi-3 SG PRES-なる
(今夜パルヴァーナ夫人によって歌が歌われる) (Moyne 1974: 250)

しかし、この他動詞の過去分詞である xānde は、同形の形容詞としても黒柳（1996）に記載があるものの、

- (3) *ketāb -e xānde
NOUN-本 エザーフェ ADJ-読まれた
(読まれた本)

という「名詞+エザーフエ+形容詞」の形式が非文法的であると判断される。

(4) afzāyeš -e vasāyel -e naqlīe havā rā ālūde karde ast.

NOUN-増加 PREP-の NOUN-手段 PREP-の NOUN-交通 NOUN-空気 POSTP-を CV 3SG PRES-PF-汚染する

(交通機関の増加が空気を汚している)

さらに、(4)のように「ālūde (汚染された)」という形容詞が、「kardan (～する)」などの本動詞を伴い複合動詞となるのも形容詞の特徴の1つだが、

(5) *hasan 'alī rā košte kard.

PSN-ハサン PSN-アリー POSTP-を ADJ-殺した Vi 3SG PAST-する

(ハサンがアリーを殺すことをした)

(5)のように、成立しない形容詞も存在する。

本発表では、これらのような「形容詞らしさ」が希薄な形容詞について、その原因を考察する。

2. 先行研究

ペルシア語の形容詞について、比較的詳細に言及している先行研究を2点挙げる。

2. 1. Lazard(1992)

The adjective does not vary in number. It may receive suffixes indicating degrees of comparison, when its meaning lends itself to it. It may be preceded by an adverb which qualifies it and, in certain cases, followed by a nominal modifier joined to it by *ezāfe*.

In the phrase, the adjective is principally used as determinant of a noun (attributive adjective), as predicate, and also, when the meaning allows it, as an adverbial word: *gūšt-e kūbīde* (ground meat) [...]

(Lazard 1992: 81)

The past participle may, like the infinitive, be preceded by different complements (predicative attribute, direct or indirect object, etc.) which are semantically closely tied to it and which form with it a syntactical unit behaving in the sentence as a simple adjective: *jūje-ye sorx karde* (fried chicken) [...]

(Lazard 1992: 168)

The past participle of a transitive verb has always a passive meaning, except when it is preceded by a direct object: compare *qiāfe-ye gerefte* (preoccupied (taken) look) and *xāne-ye āteš gerefte* (having caught fire).

(Lazard 1992: 169)

Lazardの「他動詞の過去分詞は、直接目的語が前にある場合を除いて、常に受動態の意味を持つ」という記述について、6の分析にて言及する。この受身の意味を有していることで、形容詞としてより動詞としての用法が定着していることが、「形容詞らしさ」を希薄にしている一因である。

2. 2. Faršīdvard (2005: 56-57)

sefat kalam-e īst ke qeir az esm ke hamrāh-e esm yā grūh-e esmī mī-āyad va ma'nī-e ān rā moqayyad mī-konad va towzīhī darbāre-ye ān mī-dahad.

(形容詞は名詞やその類いを伴う名詞を除いた術語で、その意味を規定し説明を与える。¹⁾)

sefat-e maf'ūrī yā sefat-e gozašte: īn sefat-hā agar az fe'l-e kota'addī be-āyand ham bar maf'ūliyat va ham bar gozašte delālat mī-konand va ma'mūlan az mādde-ye fe'l-e māzī va pasvand «he» sāxte mī-šavand. bā īn 'ellat dar zabānhā-ye farangī ānhā rā sefathā-ye fe'lī gozašte mī-nāmānd. mesāl: «košte», «dīde», «xorde».

(過去分詞と過去の形容詞: この形容詞は、他動詞由来であれば目的語と過去時制を示す。通常過去の動詞と接尾辞 *he* から構成される。このことから、西洋言語では、これらを過去分詞と名付けている。例: 「殺された」、「見られた」、「食べられた」)

īn sefat agar az fe'l-e lāzem be-āyand bar maf'ūliyat delālat na-dārand; zīrā fe'l-e lāzem maf'ūl nemī-gīrad va tanhā sefat-e gozašte-and va etlāq-e sefat-e maf'ūlī bar ānhā dorost nīst. mānand: «nešaste», «rafte», «āmade».

(自動詞由来の形容詞であれば、目的語は示されない。自動詞は目的語を取らず単独で過去の形容詞となるからだ。これを過去分詞とするのは適切ではない。例: 「座った」「行った」「来た」)

Faršīdvard は、ペルシア語における他動詞由来の形容詞が西洋の言語において過去分詞と呼ばれていると述べており、さらに、自動詞由来の形容詞については、過去分詞とすべきでないとの主張をしている。これに対する検証や批判などは本発表の目的から逸れるため、ここでは行なわない。

4. 文中の動詞と形容詞

ペルシア語における動詞と、動詞の過去分詞と同形の形容詞について文中でどのように表れるかを示す。

(6a) havā -ye² ālūde
NOUN-空気 エザーフェ ADJ-滴る
(汚れた空気)

(6b) havā ālūde ast.
NOUN-空気 ADJ-汚染する Vi PRES-PF -です
(空気が汚れている)

(6c) havā tavassot-e afzāyeš -e vasāyel -e naqlīe
NOUN-空気 PP-~によって NOUN-増加 PREP-の NOUN-手段 PREP-の NOUN-交通
ālūde šode ast.
ADJ/Vt PASTP-汚染する Vi PRES-PF -なる
(交通機関の増加により空気が汚染されている)

¹ ペルシア語の先行研究に付した日本語訳は全て発表者による。

² エザーフェの前の名詞の語尾が母音で終わる場合「ye」となる。

(6d) afzāyeš -e vasāyel -e naqlīe havā rā ālūde karde ast.

NOUN-増加 PREP-の NOUN-手段 PREP-の NOUN-交通 NOUN-空気 POSTP-を CV 3SG PRES-PF-汚染する

(交通機関の増加が空気を汚している)

(6e) havā xeylī ālūde šode ast.

NOUN-空気 ADV-とても ADJ/Vt PASTP-汚染する Vi PRES-PF-なる

(空気が非常に汚染されている)

(6a) は、「名詞+エザーフェ+形容詞」の形式で、(6b) は主語の名詞を形容している文である。

(6c) は、「汚染されている」という受身文にも、「汚染状態となっている」という状況を表わす文にも解釈できる。つまり、形容詞と動詞両方の可能性がある。(6d) は「kardan (～する)」を付けた例で、(6e) は「xeylī (とても)」という副詞で修飾している例である。(6a) ～ (6e) の例から、「ālūde」が動詞であるのか形容詞であるのかは判別できない³。では、次の例はどうか。

(7a) *mard -e košte

NOUN-男 エザーフェ ADJ-殺された

(殺された男)

(7b) mohammad tavassot-e hamīd košte šod.

PSN-モハンマド PP-～によって PSN-ハミード Vt PASTP-殺す Vi 3SG PAST-なる

(モハンマドはハミードに殺された)

(7c) * mohammad tavassot-e hamīd xeylī košte šod.

PSN-モハンマド PP-～によって PSN-ハミード ADV-とても Vt PASTP-殺す Vi 3SG PAST-なる

(モハンマドはハミードにとても殺された)

(7d) *hasan 'alī rā košte kard. = (5)

PSN-ハサン PSN-アリー POSTP-を ADJ-殺した Vi 3SG PAST-する

(ハサンがアリーを殺すことをした)

「košte (殺された)」という形容詞だが、まず (7a) のように「名詞+エザーフェ+形容詞」という形式がネイティブに不自然だと判断される。(7b) では動詞としての例を示している。(7c) も動詞としての例だが、副詞で修飾することもできないのが分かる。(7d) は (5) の再掲で、「kardan (～する)」という補助動詞を伴って複合動詞にできないことも既に確認済みである。以上のことから、košte は形容詞としての特徴を有しておらず、他動詞の過去分詞であると言える。

(6) と (7) の例文から分かる「形容詞らしさ」の有無について、実証的に示すため次の調査を行った。

³ ālūde は、自他同形の ālūdan (汚れる/汚す) 由来であり、その事象が人為的になされた場合は受身形が用いられ、形容詞が用いられる場合は、その原因よりもその状態に重点が置かれるという傾向がある。ただ、それだけでは、ālūde が形容詞か動詞かを特定することはできない。

5. 調査方法と結果

本研究の調査では、黒柳（1996）に記載のある動詞の過去分詞と同形の形容詞 95 語に、Dabīr-Moqaddam（1988）にある 27 語を追加した、合計 122 語の形容詞を対象とし、1 で示した「名詞+エザーフェ+形容詞」という形式をとるか、また「kardan（～する）」という補助動詞が付けられるか否かについて、ペルシア語母語話者に文法性判断を仰いだ。

その結果、「名詞+エザーフェ+形容詞」の形式になる形容詞は、122 語中 77 語であった。その内訳は、他動詞由来⁴：30 個、自動詞由来：29 個、自他同形動詞由来：18 個である。

また、「名詞+エザーフェ+形容詞」の形式にならない形容詞は、45 語あった。その内訳は、他動詞由来：32 個、自動詞由来：6 個、自他同形動詞由来：7 個

次に、「kardan（する）」を伴って複合動詞になれる形容詞は 36 語、ならない形容詞は 86 語あった。つまり、「形容詞らしさ」が希薄な形容詞が多々存在していることが明らかになった。

6. 分析

5 の調査結果を受け、原因として考えられる事柄を項目別に挙げていく。

6. 1. 受身形としての用法

Lazard（1992）でも言及があったように、形容詞の中で、他動詞由来のものは、(3) のように「šodan（～になる）」が付いているほうが自然であるものが多数を占めた。これは、「Vt-PASTP+šodan」という受身形とも解釈でき、形容詞ではなく、動詞としての用法が貼りついていると考えられる。

(8a) * ādamī -e āfarīde
NOUN-人間 エザーフェ ADJ-創造された
(創造された人間)

(8b) ādamī āfarīde šode
NOUN-人間 ADJ/Vt-PASTP-創造された Vi-PASTP-なる
(創造された人間)

例えば「āfarīde（創造された）」という形容詞であれば、(8a) のように「名詞+エザーフェ+形容詞」の形式は不自然とされ、(8b) のように šodan を付けることによって自然となる。だが、「形容詞+šodan」という複合動詞も多々あるため、これだけでは āfarīde を形容詞に非ずとは断定できない。

6. 2. 「名詞+動詞」としての用法

調査時はペルシア文字の表記を被験者に提示した。その際、例えば、

⁴ 「他動詞由来」とは、その形容詞と同形の過去分詞が他動詞であるため、他動詞から派生したと考えられるものである。「自動詞由来」は同様の理由で自動詞から派生したと考えられるもので、「自他同形動詞由来」とは、その形容詞と同形の過去分詞が自動詞と他動詞の両方を担っている場合、このようにした。

(9a) *lebās* -e *šoste*
NOUN-服 エザーフェ ADJ-洗われた
(洗われた服)

(9a) を、エザーフェを表記せずに提示すると⁵、

(9b) *lebās* *šoste*
NOUN-服 Vt PASTP-洗われた
(服を洗った)

と読む母語話者が多い。これは、形容詞としてより動詞としての認識が色濃く表れていることを意味する。「形容詞+名詞」ではなく、「名詞+動詞」、つまり SV の文型・用法が定着していると言える。

6. 3. 「瞬間動詞+kardan」の不成立

例文 (7) でも確認したとおり、「殺す」など瞬間動詞由来の形容詞は、*kardan* を付けて複合動詞にできない。このことから自動詞由来の形容詞より他動詞由来のものの方が動詞的特徴を残していると言える。

6. 4. 本動詞の使用の少なさ

今回の調査対象である 122 語の形容詞のもとになっている動詞の中で、そもそも本動詞として使われているものが少ない。

āzmūdan (実験する) → *āzmāyeš kardan* (実験する)
xīsīdan (濡れる) → *xīs kardan/šodan* (濡らす/濡れる)

これらのように、本動詞を用いず、「名詞+動詞」の形式を使用した述語が多数を占めている⁶。そのため、日常的に使用されていない動詞由来の形容詞を見たとき、母語話者には不自然にうつっている可能性もある。

6. 5. 定型句として定着した形容詞

最後に挙げるものは、定型句として、あたかも一語の名詞のように定着している形容詞の例である。これは、6. 4 までと異なり、形容詞としての特徴を色濃く残している例である。「*kabāb-e kūbīde* (ミンチ肉のケバブ)」、「*bastani-ye pālūde /fālūde* (繊維状のアイス)」などがあり、「名詞+エザーフェ+形容詞」の形が成立している。

7. まとめと今後の課題

本研究にて、ペルシア語における動詞の過去分詞と同形の形容詞の「形容詞らしさ」を調査したところ、多くの形容詞が次の要因で「形容詞らしさ」を欠いていることが判明した。

⁵ ペルシア文字で表記する場合、前後関係からエザーフェの有無が判断できるため、敢えて表記しないことが多い。

⁶ これは、発表者が以前行なった調査で判明したことに基づいている。詳しくは五十嵐 (2018) を参照されたい。

- ①他動詞由来の形容詞は、動詞の受身形としての用法が定着している。
- ②品詞を明示しなければ、形容詞は「名詞+動詞」の構造だと解釈されるほど、動詞としての用法が定着している。
- ③補助動詞を付けて複合動詞にできない「形容詞らしさ」の希薄な形容詞が多々ある。

本発表では、これまで辞書の記述により漫然と信じられてきた品詞分類について、疑いの余地があることをペルシア語母語話者の協力のもと示し、かつ「形容詞らしさ」をはかる、「名詞+エザーフェ（前接小詞）+形容詞」という形式をとるか、また「kardan（～する）」という補助動詞が付けられるかという基準についても提言した。

ただ、現段階では、(6e) と (7b) で挙げたような、「副詞で形容できるか否か」という形容詞の特徴についての調査ができていない。これを今後の課題とする。

引用文献

- 五十嵐小優粒 (2018) 「類型論的観点からのペルシア語受身文の特徴づけ—出現様相と頻度を踏まえた一考察—」『人間社会学研究集録』第 13 号 pp. 3-26 大阪府立大学大学院人間社会学研究科
- 黒柳恒男 (1996a) 『現代ペルシア語辞典』大学書林
- 野村剛史 (1982) 「自動・他動・受身動詞について」『日本語・日本文化』第 11 号 pp. 161-179 大阪外国語大学研究留学生別科
- 吉枝聡子 (2011) 『ペルシア語ハンドブック』白水社
- Lazard, G. (1992) *A Grammar of Contemporary Persian*, California: Mazda Publishers.
- Moyne, J. A. (1974) The So Called Passive In Persian, *Foundations of Language*, Volume 12, pp. 249-267, Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.
- دبیرمقدم، محمد. (1367/1988) ساخت های سببی در زبان فارسی، زبان شناسی، دوره 5، شماره 1؛ از صفحه 13 تا صفحه 75. (Dabīr-Moqaddam, Mohammad. (1367/1988) Sāxthā-ye Sababī dar Zabān-e Fārsī, Zabān Šenāsī, (「ペルシア語における使役構造」『言語学』5-1, pp. 13-75.))
- فرشیدورد، خسرو. (1386/2005) فعل و گروه فعلی و تحول آن در زبان فارسی، تهران: انتشارات سروش. (Faršīdvard, Xosrow. (1383/2005) *Fe'l va Grūh-e Fe'lī va Tahavvol-e Ān dar Zabān-e Fārsī* (『動詞と動詞の分類、ペルシア語における動詞の変形』) Tehrān: Enteshārāt-e Sorūš.)